

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 韓国口訣資料の電子的構造化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002646">https://doi.org/10.15084/00002646</a>

## 韓国口訣資料の電子的構造化

朴鎮浩 (ソウル大学)

本発表では、韓国口訣資料の持つ様々な情報及び構造を効果的に電子化し、研究に有用に活用できるようにする方案を考えたい。まず資料の持つ情報及び構造が比較的単純な音読口訣、次に少々複雑な字吐積読口訣、そして最も複雑な点吐口訣という順に議論を進めることにする。点吐口訣資料は韓国学術振興財団(現韓国研究財団)の支援を受けて実現した角筆点吐口訣解説プロジェクト(研究責任者:李丞宰教授)を通して電子的構造化の作業がなされ、字吐積読口訣と音読口訣資料はやはり韓国学術振興財団の支援を受けて実現した口訣辞典編纂プロジェクト(研究責任者:黄善燁教授)を通して電子的構造化作業がなされた。本発表の多くの部分は発表者がこれらプロジェクトに自ら参与しながら経験し、遂行したことを紹介するという形になるだろう。

### 1. 音読口訣

音読口訣とは、漢文原文の適切な位置に韓国語の助詞や語尾のような文法要素を挟んで漢文の理解を補助するものであるが、漢文の語順は変えずにそのまま読み、漢文の構成要素を常に音読する口訣を指す。音読口訣は高麗時代末(14世紀)から朝鮮時代にかけての資料がとても豊富に残っている。

口訣辞典プロジェクトチームの最初の課題は、この多くの音読口訣資料の中で電子化して辞典に反映する資料をどのように選択するかということであった。広範囲の文献調査及び撮影に相当な時間と費用が必要なわけであるが、口訣辞典プロジェクトにはこのような作業のための予算は策定されていなかった。幸いにも文化財庁において、国宝または宝物として指定されている典籍文化財の大部分を撮影したものを“国家記録遺産”(http://memorykorea.go.kr/)というウェブサイトを提供していた。ここで提供されている資料の中で音読口訣がついている資料を調査した結果、以下の<表1>のような文献のイメージ資料を入手することができた。宝物として指定された資料はだいたいにおいて相当に古い時代の資料であるため(高麗時代または朝鮮前期)、資料としての高い価値が保障されている。

宝物号数	文献名	所蔵状態	所蔵処	備考
694	仏説四十二章経		湖巖美術館	三経合綴
695	仏説四十二章経		湖巖美術館	三経合綴
696	金剛般若波羅蜜経		誠庵古書博物館	
698	楞嚴経	卷6-10	湖巖美術館	青龍寺版
700	禪林宝訓		湖巖美術館	
759	楞嚴経	卷1-10	国立中央博物館	1401年版
771	般若心経略疏		ソウル大学奎章閣	
938	円覚略疏注経	卷上之2	湖巖美術館	
939	楞嚴経	卷4-7,8-10	湖巖美術館	青龍寺版
959-2-2	楞嚴経	卷4-7	祇林寺	蝴蝶装
959-2-27	禪門拈頌集		祇林寺	
959-4-13	禪門拈頌集		祇林寺	
959-4-3	楞嚴経	卷2-4	祇林寺	
974	川老金剛経		ソウル歴史博物館	
1016	円覚略疏注経	卷上之2	求仁寺	
1052	天台四教儀		京畿道博物館	
1077	近思録		淑明女子大学	
1080	円覚略疏注経	卷上	国立中央博物館	
1082	金剛経		国立中央博物館	
1104	地藏経		湖林博物館	
1108	仏頂心陀羅尼経		湖林博物館	

1148	法集別行録節要并入私記		明知大学	
1153	法華經	卷1-3	Vanアジア紙博物館	
1171	円覚略疏注經	卷下之2	湖林博物館	
1193	慈悲道場懺法		Vanアジア紙博物館	
1222	法集別行録節要并入私記		Vanアジア紙博物館	
1224	仏祖三經		Vanアジア紙博物館	
1248	楞嚴經	卷1-4	湖林博物館	
1297	禪宗永嘉集		ソウル歴史博物館	金守温跋
1306	法華經	卷1,2,4,6	直指寺	

表 1：宝物として指定され“国家記録遺産”ウェブサイトを提供されている音読口訣資料

これに加え、南豊鉉教授所蔵の音読口訣資料の提供を受け、これを撮影し口訣辞典編纂に利用することとなった。南豊鉉教授による資料は、『金剛經』3種、『楞嚴經』1種、『大慧普覚禪師書』1種、『法華經』6種、『詩伝』1種、『春秋左伝』1種、『頭正論』1種である。これに南權熙教授所蔵の『楞嚴經』1種とその他個人所蔵の『誠初心学人文』2種も加わった。

本発表においては『楞嚴經』とあわせて最も多くの異本が残っている『法華經』を例として電子的構造化の過程を説明しよう。韓国において高麗末及び朝鮮時代に刊行された『法華經』はそのほとんどが戒環の『法華經要解』(全7巻)である。したがって音読口訣がついている『法華經』も全て『法華經要解』であり、また15世紀に刊経都監から韓国語で刊行された『法華經諺解』も『法華經要解』を翻訳したものである。音読口訣資料の場合『法華經』本文だけでなく戒環の解の部分にも口訣がついており、『法華經諺解』もまた本文だけでなく戒環の解の部分も諺解されている。もし、もっと多様な『法華經』のテキスト/注釈書に口訣がついて伝わっていたならば資料の構造化の問題がより複雑であったはずだが、全て戒環の『法華經要解』に一本化されていたために作業が比較的単純であったのは幸いである。口訣辞典プロジェクトチームにおいてイメージファイルを確保した音読口訣資料は、宝物1153号(Vanアジア紙博物館(핀아시아종이博物館)所蔵)、宝物1306号(直指寺所蔵)、南豊鉉教授所蔵本(以下素谷本とする)の6種であるが、全7巻がすべて揃っているものではなく、すべて一部のみ伝わっている。巻2を例として説明すれば、宝物1153号、宝物1306号、素谷本3、5、6が残っている。そして、口訣資料ではないが韓国語史研究において非常に重要な位置を占めるハングル資料『法華經諺解』も参考用として電子的構造化の作業に含まれた。また『積譜詳節』及び『月印積譜』にも『法華經』を翻訳した部分があり、これらもまた作業に含まれることとなった。ただし、『法華經』巻2に該当する部分は『積譜詳節』には無く、『月印積譜』巻12にのみ存在する。これら資料のイメージは<図1~9>を参照されたい。



妙法蓮華經卷第二  
 溫陵開元蓮寺比丘 戒環 解  
 二喻說一周被中根  
 譬喻品第三  
 文四初喻說  
 譬者引淺况深喻者托言訓曉由前法說示多方  
 便皆為一乘上智已悟中根未解故引三車一門  
 之淺以况三乘一道之深而訓曉焉故名譬喻品  
 經有九喻謂火宅窮子藥草化城繫珠墜釜井王歸  
 父少醫師膏唯言七喻遺却鑿井父少二喻謂是  
 旁出寶非旁也喻說文二初法說緒餘二喻說正

图 3：宝物1153号『法華經』卷2卷首

妙法蓮華經卷第二  
 溫陵開元蓮寺比丘 戒環 解  
 二喻說一周被中根  
 譬喻品第三  
 譬者引淺况深喻者托言訓曉由前法說示多方  
 便皆為一乘上智已悟中根未解故引三車一門  
 之淺以况三乘一道之深而訓曉焉故名譬喻品  
 經有九喻謂火宅窮子藥草化城繫珠墜釜井王歸  
 父少醫師膏唯言七喻遺却鑿井父少二喻謂是  
 旁出寶非旁也喻說文二初法說緒餘二喻說正

图 4：宝物1306号『法華經』卷2卷首

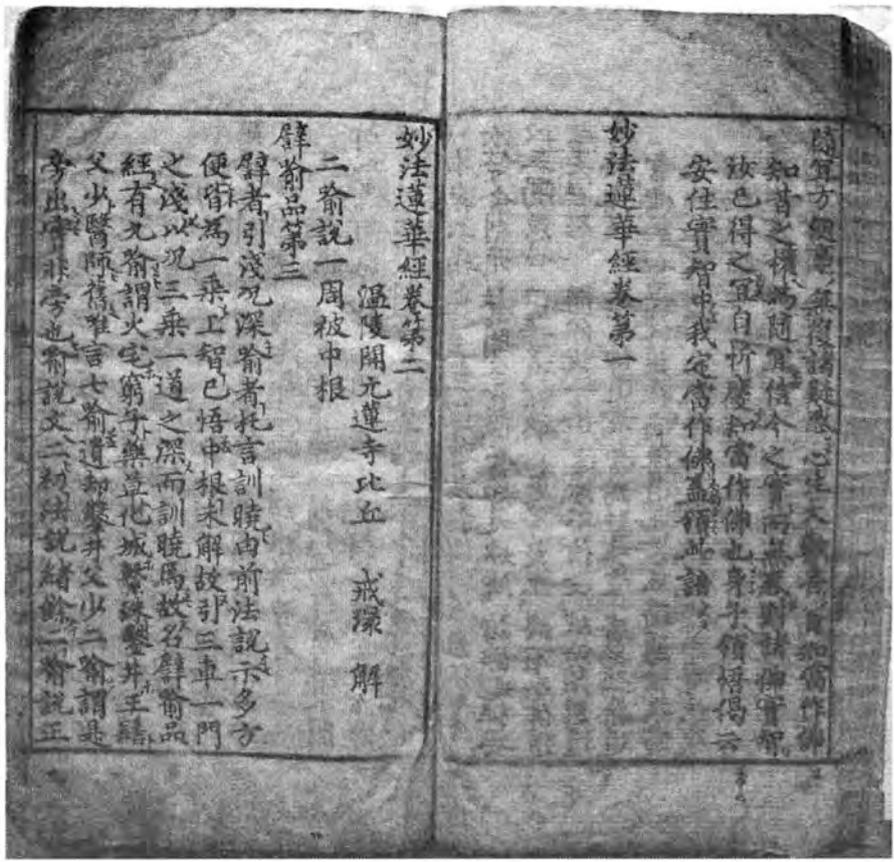


圖 5：素谷本3『法華經』卷2卷首

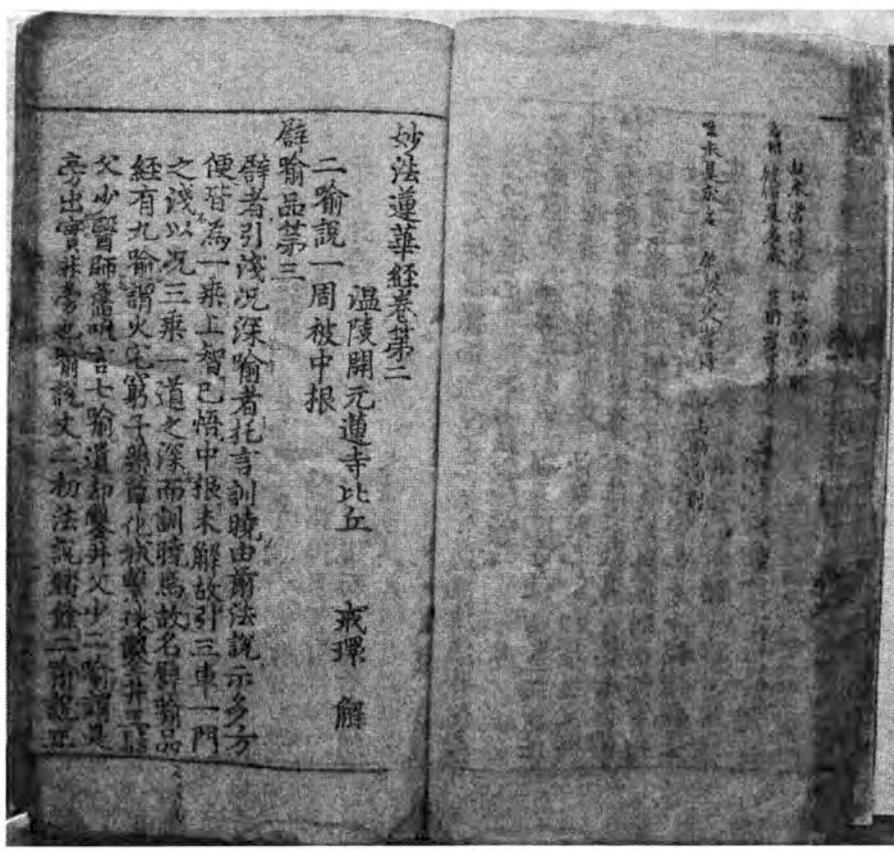


圖 6：素谷本5『法華經』卷2卷首





ハンゲル口訣文では反対になっている。ただし、『月印釈譜』には対応タグがついていない。

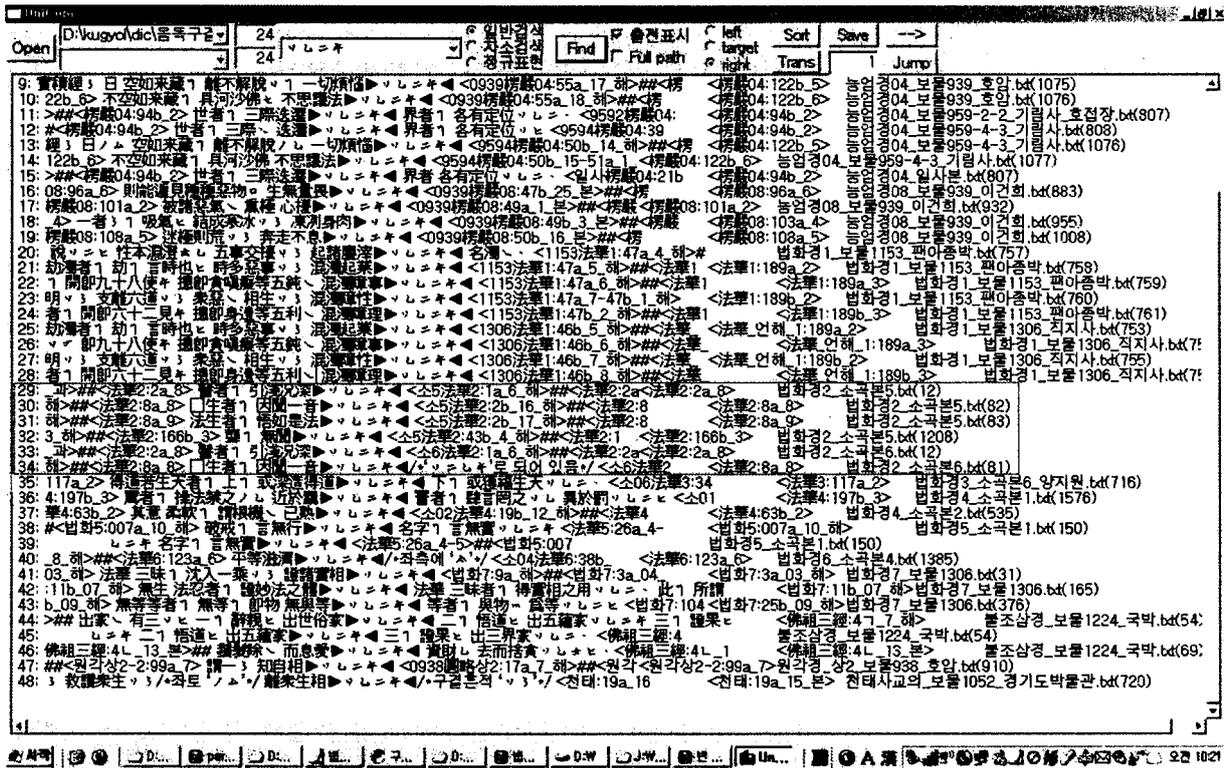


図 10 : Uniconcで'ㄹㄷㄷㄷ'を検索した結果画面(赤線の中が『法華経』巻2の検索結果)

<法華2:2a\_8> 譬는 년가오닐 혀 기프닐 가줄빌 씨오  
 <法華2:2a\_9> 喩는 마를 브터 마르쳐 알일 씨니  
 <法華2:2a\_10> 알짚 法說엿 한 方便 毘사미 다 一乘 爲호샤물 브터 上智는 호마 알오  
 <法華2:2a\_11-2b\_1> 中根은 아디 門을써 세 술위 門 年가오물 혀샤  
 <法華2:2b\_2> 三乘 一道의 기푸물 가줄비샤 마르쳐 알외시니 그릴씨 일후미 譬喩品이라  
 <法華2:2b\_3> 經에 아홉 喩ㅣ겨시니  
 <法華2:2b\_4> 火宅과 窮子와 藥草와 化城과 繫珠와 鑿井과 王瞿와 父少와 醫師를 니르니  
 <法華2:2b\_5> 네는 오직 年급 喩를 니르고  
 <法華2:2b\_6> 鑿井과 父少와 두 喩를 브려 이 겨투로 나니라 니르니 實엔 겨터 아니라

図 11 : 『法華経詳解』詳解文の分節及びタグ

구: <法華2:1b\_1\_해> 譬者는 引淺況深이오 <法華2:2a\_8>  
 언: <法華2:2a\_8> 譬는 년가오닐 혀 기프닐 가줄빌 씨오  
 월: <月釋11:129a\_3\_주> 譬는 년가오닐 거슬 혀 기프닐 거슬 가줄비고  
 1153: <法華2:2a\_8> 譬者 1 引淺況深키 <1153法華2:1a\_6\_해>  
 1306: <法華2:2a\_8> 譬者 1 引淺況深키 <1306法華2:1a\_6\_해>  
 소3: <法華2:2a\_8> 譬者 1 引淺況深키 <소3法華2:1a\_6\_해>  
 소5: <法華2:2a\_8> 譬者 1 引淺況深키 <소5法華2:1a\_6\_해>  
 소6: <法華2:2a\_8> 譬者 1 引淺況深키 <소6法華2:1a\_6\_해>  
 -----  
 구: <法華2:1b\_2\_해> 喩者는 托言訓曉ㅣ니 <法華2:2a\_9>  
 언: <法華2:2a\_9> 喩는 마를 브터 마르쳐 알일 씨니  
 월: <月釋11:129a\_4\_주> 喩는 브터 年를 마르쳐 알일 씨니  
 1153: <法華2:2a\_9> 喩者 1 托言訓曉키 <1153法華2:1a\_7\_해>  
 1306: <法華2:2a\_9> 喩者 1 托言訓曉키 <1306法華2:1a\_7\_해>  
 소3: <法華2:2a\_9> 喩者 1 托言訓曉키 <소3法華2:1a\_7\_해>  
 소5: <法華2:2a\_9> 喩者 1 托言訓曉키 <소5法華2:1a\_7\_해>  
 소6: <法華2:2a\_9> 喩者 1 托言訓曉키 <소6法華2:1a\_7\_해>

図 12 : 『法華経』卷2의冒頭 各種異本対照資料

このように各資料に対応タグがついていれば、ある一つの文献の特定用例を出発点として異なる文献の対応部分を容易に検索することができる。上の<図10>において“<法華2:2a\_8>”という対応タグをUniconcで再び検索すれば、次のような結果を得ることになる。

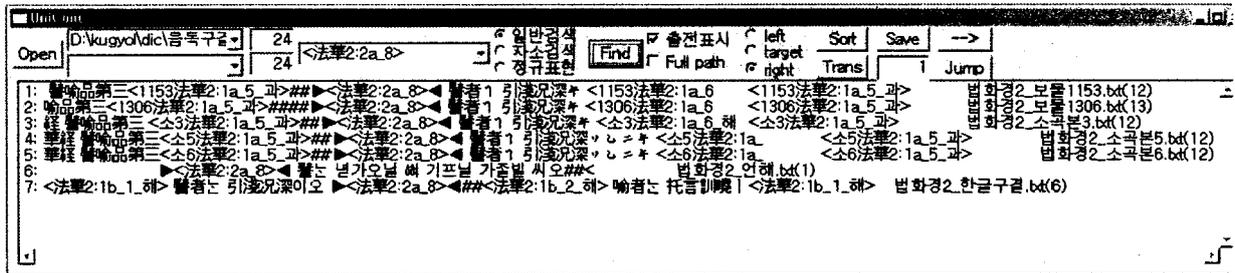


図 13：Uniconcでタグ“<法華2:2a\_8>”を検索した結果

このような作業を遂行するにあたり最も困難だったのは、各テキストを適当な長さに分節する作業であった。分節作業を正確にするためには、作業者が中世韓国語に関して相当な文法知識を具えつつ、該当テキストの構造及び内容を正確に把握している必要がある。『法華経諺解』諺解文の分節作業において誤謬が発生すれば、他の資料の分節においても同一の誤謬が波及するため、まず諺解文の分節作業において正確性を期する必要がある。一次分節作業の後、口訣辞典チームの数人のシニアメンバーが校閲したが、まだ多くの誤謬が残っていることが予想される。分節にあたっては唯一つの正答が存在するわけではなく、複数の可能性があるという場合ももちろん多々あった。

先だって、『法華経諺解』の諺解文を入力する段階において、該当分節単位が『法華経』本文なのか戒環の解なのかという情報の重要性に前もって気付くことができず、後の段階ではじめてそれに気付いたことを言及した。しかし、本文と解の区別だけでなく、テキスト構造に関するより細密な情報が電子化に含まれるのが望ましかったという事実に関しては、資料の電子化作業がほとんど終わったころにはじめて気付くところとなった。そこで、こういった情報は各文献ファイルには含めることができず、別途のファイルとして作成することとなった。『法華経』のテキスト構造をどのように把握するのかというのも決して簡単な問題ではないが、韓国に現在伝わる『法華経要解』文献には戒環の科判による科文が載せられていて、これをもとにテキスト構造を把握することが可能である。この情報は<図14>を参照されたい。

口訣辞典編纂作業をする中で、テキストの対応部分を検索する際、上述の如き二段階にわたる検索ではなく一度に検索できるようにしたらどうかという意見が提出されもした。一種の並列コーパス(parallel corpus)検索機能というわけである。発表者自身も当初からそのような機能をUniconcに追加したかったが、この作業は多大なる時間と労力を要するため、手をつけられずにいた。そのような中、口訣辞典プロジェクトが終わった後にプログラミング言語Pythonに熟達した(株)タウムコミュニケーション(다음커뮤니케이션)の李斗行先生のお力添えを頂き、並列コーパス検索機能を備えた新たなコンコーダンスであるPyconcの製作を試みたことがある。いまだ未完成であり、並列コーパスも3つ以上のテキストの同時検索はまだ不可能で、2つの対応テキストの同時検索のみが可能な状態であるが、今後機能を向上させていく計画である。<図15>を参照されたい。15、16世紀ハングル文献で“-더라”を検索した結果であるが、諺解文のすぐ下にそれに対応する漢文原文が表示されている。中世韓国語ハングル文献の場合には、このように二つの対応テキストの同時検索機能だけでも十分に有効に活用することができる。なお、特にPyconcのための別途のGUIは製作せず、Eclipseという統合開発環境(IDE)を利用している。

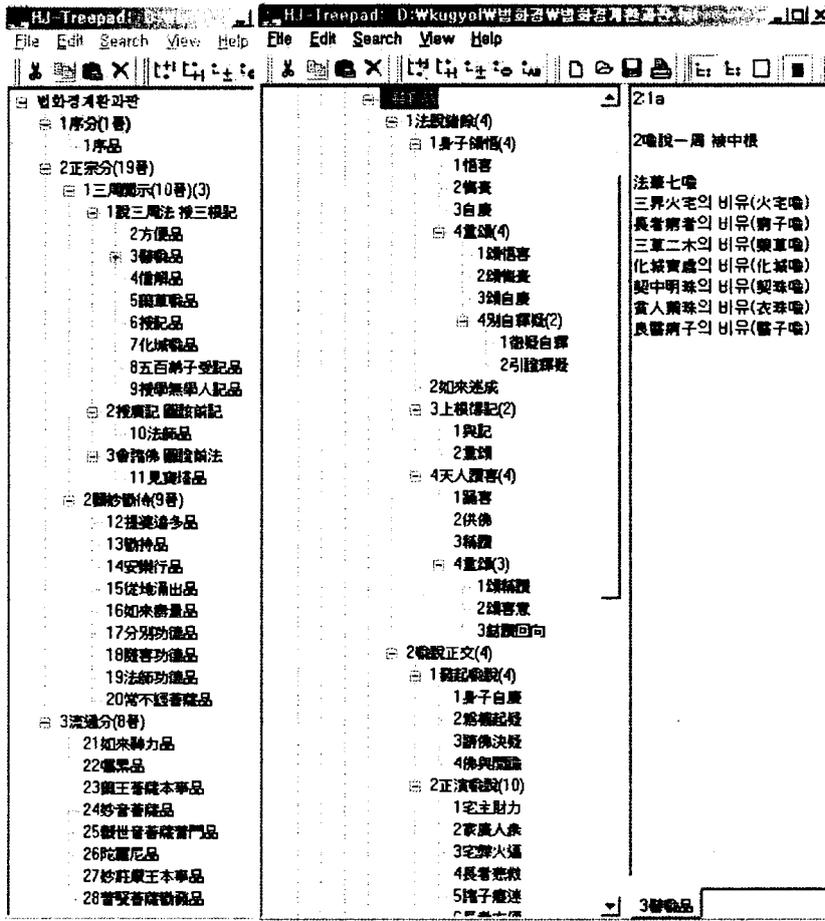


図 14 左:『法華經』全体(計28品)の構造、右:譬喩品の構造



図 15 : Pyconco で '-더라'를 檢索した 結果





<p>&lt;구인 上:02:01&gt;  A: 信行<sup>レ</sup>具足<sup>ニ</sup>カ  B: 信行<sup>レ</sup> 具足<sup>ニ</sup>カ  C: (清)信行<sup>ヲ</sup> 具足<sup>ス</sup>시며  D: ㉠(十六大國王은 ...와) 清信行<sup>ヲ</sup> 具足<sup>하</sup>시며,  E: (청)신행<sup>ヲ</sup> 具足<sup>하</sup>였다.&lt;491&gt;</p> <p>&lt;구인 上:02:01&gt;  A: 復<sup>ッ</sup> 有<sup>ル</sup>[セナカ] 五道<sup>ニ</sup>一切衆生<sup>リ</sup>・  B: 復<sup>ッ</sup> 五道<sup>ニ</sup>一切衆生<sup>リ</sup> 有<sup>ル</sup>セナカ  C: 復<sup>キ</sup> 五道<sup>ニ</sup> 一切衆生<sup>이</sup> 잇거며  D: 또 ㉠五道<sup>의</sup> 一切衆生<sup>이</sup> 잇으며  E: 또 다섯 갈래<sup>의</sup> 세계<sup>에</sup> 일체 중생<sup>이</sup> 잇었고,</p> <p>&lt;구인 上:02:01-02&gt;  A: 復<sup>ッ</sup> 有<sup>ル</sup>[セナカ] 他方<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>[スレヒセ] 可<sup>ク</sup>[セツト] 量<sup>ノ</sup>カ・衆・  B: 復<sup>ッ</sup> 他方<sup>ニ</sup> 量<sup>ノ</sup>カ{可<sup>ク</sup>}セツト 不<sup>レ</sup>スレヒセ 衆<sup>ニ</sup> 有<sup>ル</sup>セナカ  C: 復<sup>キ</sup> 他方<sup>ニ</sup> 量<sup>이</sup> 높<sup>히</sup> 안디잇<sup>는</sup> 衆<sup>이</sup> 잇거며  D: 또 ㉠他方<sup>의</sup> 헤아릴 수 없<sup>는</sup> 衆生<sup>이</sup> 잇으며  E: 또 타방<sup>의</sup> 헤아릴 수 없<sup>는</sup> 대중<sup>이</sup> 잇었는데,</p> <p>&lt;구인 上:02:02-03&gt;  A: 復<sup>ッ</sup> 有<sup>ル</sup>[セナカ] 變<sup>ル</sup>[ツキ] 十方淨土<sup>ニ</sup>・現<sup>ル</sup>[ツキ] 百億高座<sup>ニ</sup>・化<sup>ス</sup>[ツキノヒ] 百億須彌寶花<sup>ニ</sup>・  B: 復<sup>ッ</sup> 十方淨土<sup>ニ</sup> 變<sup>ル</sup>百億高座<sup>ニ</sup> 現<sup>ル</sup>百億須彌寶花<sup>ニ</sup> 化<sup>ス</sup>百億須彌寶花<sup>ニ</sup> 有<sup>ル</sup>セナカ  C: 復<sup>キ</sup> 十方淨土<sup>ヲ</sup> 變<sup>히</sup>져 百億高座<sup>ヲ</sup> 現<sup>히</sup>져 百億須彌寶花<sup>ヲ</sup> 化<sup>히</sup>져 혼<sup>는</sup> 잇건여  D: 또 十方淨土<sup>ヲ</sup> 變化<sup>시</sup>키고 百億高座<sup>ヲ</sup> 나타내<sup>고</sup> 百億須彌寶花<sup>ヲ</sup> 變化<sup>시</sup>키고 하<sup>는</sup> 이 잇는데,  E: 十方淨土<sup>에</sup> 變化<sup>한</sup> 백억<sup>의</sup> 높은 자리<sup>가</sup> 나타나 百億<sup>의</sup> 수미산 보배 꽃[須彌寶華]으로 變化<sup>하</sup>니,</p>
---

图 19 : 字吐积読口訣資料『旧訳仁王経』張2行1~3(情報が綜合されたバージョン)

<图19>において、Aは語順を変えず原文のまま提示したものだが、左側吐は“[]”中に入れてある。Bはこれを韓国語の語順で読んだ“読み下し文”であり、CはBにおいて口訣字で表記した部分をハングルで転字(transliteration)したものである。DはB、Cに基づいて現代韓国語に翻訳したものであり、Eは東国大学訳経院から刊行された『ハングル大蔵経』(『한글大藏經』)の該当部分を引用したものである。口訣辞典の作業者は、まず<图18>の資料により用例の抽出作業を行ってから、不審な部分やもう少し詳しく見たい部分を<图19>の資料で探してみるという具合に作業を進めた。

### 3. 点吐口訣

点吐口訣とは、漢字の特定位置に点や線などを記入することで特定要素を表現する方式の口訣である。<图20>を参照されたい。点吐口訣は一種の积読口訣であると言えるが、字吐积読口訣と比較すれば、点吐を字吐として解読するという過程が一段階余計に挟まっていると言える。また左側吐・右側吐の区別及び逆読点というデバイスを通じて読む順序を明示的に示す字吐积読口訣と異なり、点吐口訣では句節末に全ての吐を集めてつける。例えば“他動詞+目的語”構文において目的語につく対格助詞と他動詞につく語尾を、句節末の目的語の一番最後にまとめてつけるという具合である。したがって一つの漢字に複数の点吐がある場合、これらをどういう順序で読むべきかということも知っておかなければならない。

点吐口訣資料を電子化するにあたって、まず点吐が打たれる位置を数字の座標で表現することにした(<表2>参照)。実線の四角形は漢字の字画を囲む仮想的な四角形を表す。点吐は漢字の内部に打たれることも外部に打たれることもあり、その位置は大体にして縦横五段階に分けられ、合計25箇所の位置を座標で区別して表現することができる。

11	12	13	14	15
21	22	23	24	25
31	32	33	34	35
41	42	43	44	45
51	52	53	54	55

表 2 : 点吐の位置の座標

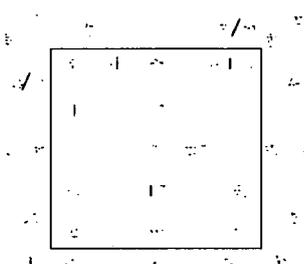


表 3 : 『瑜伽師地論』点図

復次云何雜染施設建立謂由三種  
雜染應知何等為三一煩惱雜染二  
業雜染三受雜染煩惱雜染云何  
按南曰  
自性若分別因位及與門上品顛倒  
差別諸過患

图 20：点吐口訣資料『瑜伽師地論』卷8(誠庵古書博物館所藏)張1行5~10

ところが<表3>に見えるように、実際には『瑜伽師地論』に現れる点吐の位置は<表2>の座標体系よりもっと細分化されることが度々ある。例えば対格助詞‘ㄷ(을)’の位置は、四角形の右辺の線上ほどにあたる。しかしこの位置に漢字の字画がある場合、これを避けるために線の内側や外側に若干ずれて記入されることがあるため、対格助詞‘ㄷ’に該当する点吐の位置は34と35の間であると言える。このような場合、座標を34~35と表現することにする。このようにして、点吐のより細分化された位置が発見される度に座標体系自体を全面的に修正するよりは座標体系を固定しておき、その体系内で細分化された位置を表現する方案を摸索したものである。この方式によれば‘ㄴ(라)’の位置は31~32、‘+ (두)’の位置は22~23、‘ㄹ(이)’の位置は22~32、‘ㄷ(ㄱ)’の位置は32~42、‘ㅍ(ㅍ)’の位置は34~44、‘ㄷ(ㄷ)’の位置は23~33、‘ㄹ(인)’の位置は33~43、‘ㄱ(은)’の位置は33~34とすることができる。さらに、‘ㄱ(고)’と‘ㅍ(곰)’は共に15の位置とすることができるが、‘ㅍ’は四角形の右上の角に接近して打たれるのに対し‘ㄱ’は角から遠く離れて打たれるので、‘ㄱ’の位置は+15と表示する。このようにして全ての点吐の細密な位置を座標で表現することができるようになった。

『瑜伽師地論』の点吐はそれぞれの位置の単点を土台とし、点吐がどのような形で現れるかによって該当位置の単点に対応する字吐の前にどのような要素が添加されるかが規則によって大体分かる。斜線(/)の場合は‘ㄷ(을)’が添加され、逆向きの斜線の場合は‘ㄴ(은)’が添加される。四角形の外側で、斜線/逆斜線が四角形に接近していれば‘ㄷ/ㄴ’が添加されるが、斜線/逆斜線が四角形から遠く離れていれば‘ㄷ/ㅍ(을)/ㅍ(을)’が添加される。

点吐口訣資料を電子的に構造化した結果は、次のように例示できる。

<유가08 01:05-07>  
A: 復次[23(·)] 云何[34(·)] 雜染施設建立[51(·),15(·)#15(\)] 謂由[역독선] 三種雜染[34(·),24(·),33~43(/)] 應知[42(\),51(·)] 何等[34~35(/)] 爲三[51(·),15(·)] 一煩惱雜染二業雜染三生雜染[51(·)]  
B: 復次[ㄷ] 云何[ㄷ] 雜染施設建立[ㄷ, / ㅍ] 謂由三種雜染[ㄷ, ㄷ, ㄷ] 應知[ / ㅍ, ㅍ] 何等[ㄷ ㄷ] 爲三[ㄷ, / ㅍ] 一煩惱雜染二業雜染三生雜染[ㄷ]  
C: 復次ㄷ 云何ㄷ 雜染施設建立(ㄷ) | / ㅍ 謂 三種 雜染 ㄷ 由 ㄷ ㄷ ㄷ 知 / ㅍ {應} ㅍ | 何(ㅍ) 等 ㄷ ㄷ {爲} 三(ㄷ) | / ㅍ 一 煩惱雜染 二 業雜染 三 生雜染(ㄷ) |  
D: 또 다음으로 무엇을 雜染施設建立이라 하는가? 즉 세 가지 雜染을 말미암은 줄을 알아야 한다. 어떠한 것들을 셋이라 하는가? 첫째 煩惱雜染, 둘째 業雜染, 셋째 生雜染이다.  
E: 어떻게 여러 염오 등의 일어남을 시설하여 세움이라고 하느냐 하면, 세 가지의 여러 염오인 줄 알아야 한다. 무엇이 세 가지인가. 첫째는 번뇌의 여러 염오요, 둘째는 업의 여러 염오요, 셋째는 남의 여러 염오이다.

<유가08 01:07-08>  
A: 煩惱雜染云何[11~21(-),+15(·)] 嚙挖南曰[15~25(-)]  
B: 煩惱雜染云何[ㅍ, ㅍ] 嚙挖南曰[ㅍ]  
C: 煩惱雜染 云何(ㅍ) ㅍ 嚙挖南 曰ㅍ  
D: 煩惱雜染은 무엇인가? 嚙挖南으로 말하기를  
E: 번뇌의 염오라 함은 무엇이나 하면, 우다아나로 말하리라.

図 21 : 点吐口訣資料『瑜伽師地論』卷8(誠庵古書博物館所蔵)張1行5~8の構造化された資料

Aは、原文に記入された点吐及び符号を可能な限り客観的に表現したものである。点吐の位置を座標で示した上で、括弧内に点吐の形状を示した。一つの漢字に点吐が二つ以上ある場合、読む順序に従って点吐を配列した。Bは、現在までの研究結果に基づき、Aに示された点吐一つ一つを字吐で転字(transliteration)したものである。点吐がどのような字吐に対応するのかまだ明らかでない場合、BにおいてXで表示する。一つの点吐が二つ以上の口訣字の連鎖に対応し、これらの中で一部は明らかだが一部は未詳の場合、未詳である部分をxで表示する。CはA、Bに基づく“読み下し文”である。BでXやxとなっている部分はCでもそのまま表示する。そしてA、Bには無いが当時の言語に対する文法的知識から必要だと判断される要素に関して

は括弧内に入れて補充した。包括動詞‘ッ(ㄱ)’や繫辞‘ㄹ(ㅇ)’が最もよく補充される要素である。DはCに基づく現代語訳であり、Eは東国大学訳経院から刊行された『ハングル大蔵經』(『한글大藏經』)の該当部分を引用したものである。

全ての点吐口訣資料に対して<図21>のような形式の資料が構築されれば、研究者はUniconcのような検索プログラムを利用して特定位置の特定形状の点吐を検索でき、用例を抽出して文脈をよく見ることによって解説を進展させることができる。例えば点吐口訣研究の初期段階では11の位置の単点(以下11(・)で表示)が‘如’字構文の‘ㄹ’に対応するという事実だけが知られていた。ところが、11(・)を検索して文脈を観察した結果、‘如’字構文以外の特徴的な構文が発見された。‘當知’や‘應知’の後に目的語節(objectclause)が来る時、その目的語節の最後に11(・)が付く傾向が見られたのである(<図22>参照)。

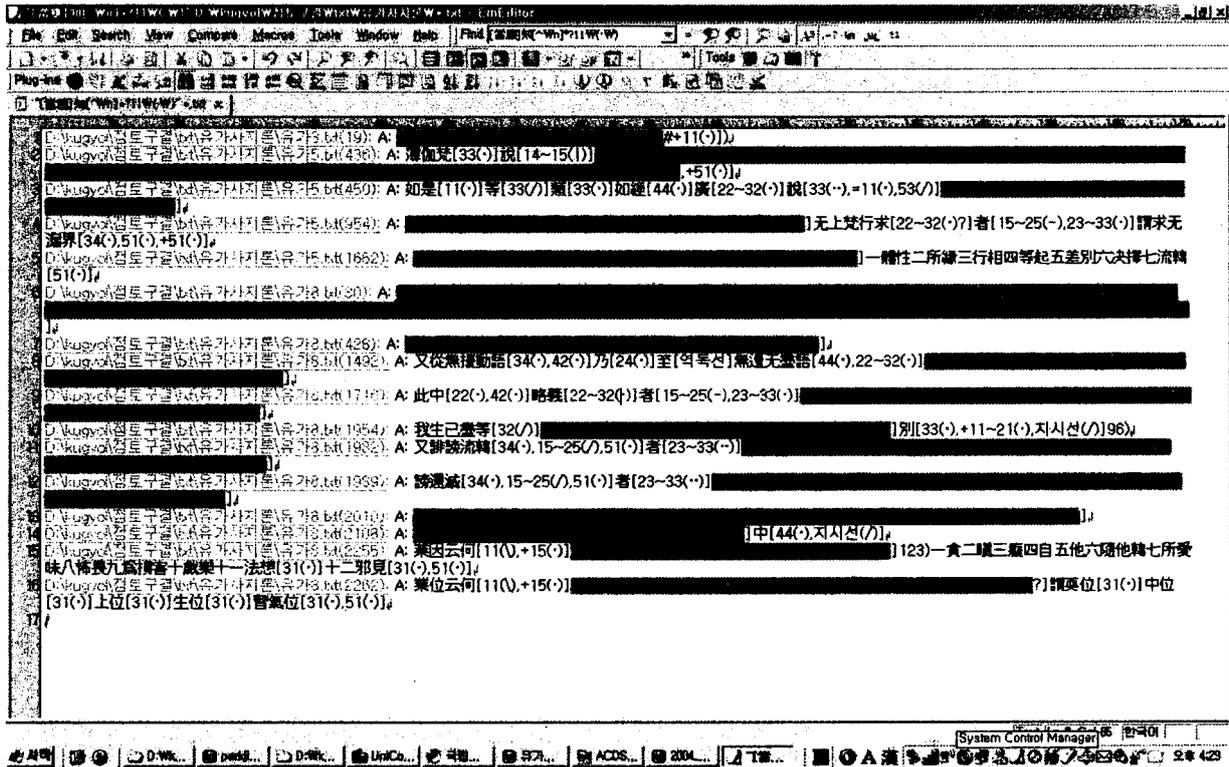


図 22 : EmEditorで正規表現“[當應]知[^\n]\*?11(\cdot)”を検索した結果

字吐積読口訣の場合、このように動詞に後置された要素の後には助詞‘-/: (여)’が付き、後置された要素が名詞句ではなく節である時には依存名詞‘ㄷ’と助詞‘여’が結合した‘ㄷ(더)’が使用される(朴鎮浩2005)。このことを通して、11(・)が‘ㄹ’のみならず‘ㄷ’に対応する場合もあることが分かった。(朴鎮浩2003)。その後の研究成果によれば、‘ㄹ’に対応する点吐と‘ㄷ’に対応する点吐は共に11の位置だと言えるが、前者は11の領域内でも少し左下の方、後者は右上の方に打たれ、両者が弁別的であるという主張もなされるようになった(徐民旭2005)。

#### 4. 点吐と字吐が共に記入された資料

『合部金光明經』卷3(大邱の金秉九氏所蔵)は、字吐積読口訣資料としてのみ知られていた(南権熙1995)。ところが2004年4月26日この資料に字吐のみならず点吐も記入されているという事実が発表者によって発見された。その時まで知られていた『瑜伽師地論』及び『華嚴經』点吐口訣は皆角筆で記入されていたが、この資料においては時々角筆点吐が確認されるものの、大部分は墨書により点吐口訣が記入されていた(<図23>参照)。発表者がこの資料を拜見する以前に他の研究者らによってこの資料の点吐の有無が調査された事はあったが、点吐の発見には至らなかった。彼らが点吐を発見できなかった原因は、第一に彼らが主に角筆点

吐に氣をとられてしまい墨書点吐にはあまり氣を配れなかったこと、第二に彼らが『瑜伽師地論』の点吐体系に対する詳細な知識を持っていなかったということがあげられそうである。



図 23 : 『合部金光明經』卷3張2行1~8

『合部金光明經』卷3の点吐体系は『瑜伽師地論』のそれとほぼ同一である。さらにこの資料には点吐と字吐が共に記入されており、いわば点吐口訣におけるRosetta Stoneと呼ぶに値する。この資料を通して、それまでの『瑜伽師地論』点吐口訣に対する張景俊、徐民旭等の解説が非常に正確なものだったことを確認することとなった。さらに、この資料の字吐には誤謬が散見されるのに比して点吐は非常に正確に記入されており、言語史資料としての価値が字吐よりさらに高いと言える。おそらくこの資料に点吐が記入された後、この資料の点吐体系に対する知識が不完全であった別の人物が点吐を参照しつつ字吐を書き加えたものと推測される。

この資料は字吐と点吐が共に記入されているため、電子的に構造化するにあたって最も複雑な問題を引き起こす。この資料は次のような形で電子化されている。

<금광3, 02:01>  
P: (譬如寶須彌)山王·是名檀波羅蜜因  
Q: (譬 寶須彌)山王(如)是名檀波羅蜜因  
A: (譬如寶須彌)山王[11~21(·)]구결자(·)(45(·))是[34(·)]名[54(·)?-각]檀波羅蜜因[53(·),55(·)?-각]  
B: (譬如寶須彌)山王[·]是[·]名[·]檀波羅蜜因[·]  
C: (譬 寶須彌)山王(如)是名檀波羅蜜因  
D: 비유하면 寶須彌山王과 같은 것 이것을 일컬어 檀波羅蜜因이라 하며  
E: 비유하면 보배로 된 수미산과 같으니 이것을 보시바라밀의 인(因)이라 한다.  
N: 善男子。譬如寶須彌山王 饒益一切。此菩提心 利衆生故。是名第一布施波羅蜜因。  
O: 선남자야, 마치 보배 수미산왕이 온갖 것을 이익케 하는 것과 같이, 이 깨달음의 마음도 중생을 이롭게 하기 때문에 이것을 제1 보시바라밀의 인(因)이라고 이름한다.)

<금광3, 02:01-02>  
P: 第二發心(譬)如[·]大地(持)一切(法)事(故)是名尸波羅蜜因  
Q: 第二發心(譬)如大地(持)一切(法)事(故)是名尸波羅蜜因  
A: 第二發心[33(·)]譬[23~33(·)]如大地[22~32(·)-잡+]持一切(法)事[53(·)?,+35(·)?#35(·)?]故[43(·),21(·)?#11~21(·)?-각]是[34(·)]名[54(·)?-각]尸波羅蜜因[53(·),+55(·)](44(·))  
B: 第二發心[·]譬[·]如大地[·]持一切(法)事[·]故[·]是[·]名[·]尸波羅蜜因[·]  
C: 第二發心(譬)如大地(持)一切(法)事(故)是名尸波羅蜜因  
D: ②第二發心은 비유하면 大地가 一切 法이니 事이니 하는 것을 지니는 것과 같은 까닭으로 이것을 일컬어 尸波羅蜜因이라 하며  
E: 두 번째 발심이란 비유하면 대지와 같이 일체법의 일을 가진 까닭이라 이것을 지계[尸]바라밀의 인이라 이름한다.  
N: 善男子。譬如大地持衆物故。是名第二持戒波羅蜜因。  
O: 선남자야, 마치 대지(大地)가 모든 물건을 가지고 있는 것과 같기 때문에 이것을 제2 지계바라밀의 인이라고 이름한다.)

図 24 : 『合部金光明經』卷3張2行1~2の電子的構造化

<図24>において、A~Eは<図21>の場合と同じである。Pはこの資料に記入された字吐積読口訣をそのまま判読した結果であり、Qはこれを韓国語の語順で読み下したものである。すなわちP、Qは<図19>のA、Bに相当する。Nは『金光明經』のまた別の漢訳本である『金光明最勝王經』の該当部分であり、Oは東国大学電子仏典研究所ウェブサイト(<http://ebti.dongguk.ac.kr/>)で提供するその韓国語訳である。Aにおいて点吐の位置と形状を示した後に‘-각’としたのはこの点吐が角筆によることを表し、‘-잡’とは角筆と墨書が共にあることを表す。‘-잡’の後に‘+’とあるのは、角筆点吐と墨書点吐の位置に少しずれがあることを表す。‘-잡+’と表示されたものは、角筆点吐と墨書点吐が時を隔てて別々に記入された可能性が高い。‘-잡’の後に‘+’表示の無いものは角筆点吐と墨書点吐が同じ位置に重なっているものだが、両者が時を隔てて別々に記入された可能性もあり、また角筆の先に墨をつけて同時に記入した可能性も考えられそうである。これに関する詳細なことは、現在研究者らに配布されているイメージファイルだけでは判断しにくい。実物調査及びより高解像度のイメージの撮影が切実に望まれている。

## 5. これからの課題

口訣資料の電子化に関して最も急がれる課題は、入力資料の正確さを高めることである。点吐口訣と字吐釈読口訣の場合には資料の量が相対的に少なく、比較的多くの時間と労力を費やして入力し、何度も検討を重ねたものなので割合正確な方だが、音読口訣資料は量の多さに比して十分な時間と労力を投資できなかったため、多くの誤謬が残っているものと思われる。音読口訣の場合には特に一次入力作業に当たった者が必ずしも作業に熟練していたわけではなく、また校閲作業も十分とは言えない。研究者たちが間違いだらけのコーパスを検索し研究に利用しているというのは、大きな問題となり得ないはずがない。

コーパスの誤謬修正作業のため、あるいは研究に際して検索した結果に不審な点がある場合などにも速やかに原文を確認できるようにするために、検索プログラムに原文イメージ確認機能が追加されると良いだろう。検索結果から、該当用例またはそれに関連付けられたボタンをクリックすれば該当用例の原文イメージが開かれるという具合である。

このようなコーパス構築・修正作業や検索プログラムの開発・改善作業には多くの人力と費用が必要となるだろう。政府からの研究費を得ることも重要かもしれないが、現段階では研究費を取るにしても、これに参与するに足る熟練した人力が著しく不足した状況であると思われる。まずは研究の底辺を拡大し、地道に研究力を育てる必要があるであろう。

### 参考文献

- 南権熙(1995), 高麗 釋讀口訣 資料『金光明經』卷三의 書誌的 分析, 口訣學會 月例講讀會 發表論文.  
朴鎮浩(2003), 『瑜伽師地論』點吐口訣에서 11 位置의 單點에 對應되는 字吐, 口訣學會 第28回 全國學術大會 發表論文.  
朴鎮浩(2005), 倒置 構文의 助詞 '-(이)여'에 對하여, 『우리말 研究 서른아홉 마당』, 太學社.  
徐民旭(2005), 『瑜伽師地論』卷5,8에 懸吐된 點吐의 位置 細分에 對하여, 『口訣研究』15, 口訣學會.  
張景俊(2007), 『瑜伽師地論 點吐釋讀口訣의 解讀 方法 研究』(國語學叢書 58), 太學社.  
黃善燁, 李田京, 河貴女 外(2009), 釋讀口訣 辭典, 圖書出版 J&C. [附錄CDに音読口訣辞典収録]